26. 腸閉塞で発症した小腸 stromal tumor の1例

釜田茂幸，奥野厚志，越川尚男
（住友重機浦賀）

症例は51歳女性で腹痛・腹部膨満を主訴に来院。腸閉塞の診断で入院したが，イレウス管による保存的治療で軽快せず，開腹手術を施行した。回盲部より約100㎝の回腸に腫瘤を認め，腸閉塞の原因と考えられた。病理学的には benign GIST，uncommitted type であった。小腸間葉系腫瘍は比較的稀な疾患で，症状・診断に特有な所見はなく，診断に苦慮する場合がある。腸閉塞においては，GIST を含めた小腸腫瘍も考慮する必要がある。

27. 類基底細胞癌と扁平上皮癌の同時性重複が認められた食道表在癌の1例

河野宏彦，西谷　慶，久保木知
山田義人，漆原　徹，横山孝一
（県西総合）
平沼孝之　（同・内科）

症例は64歳男性。平成14年2月，上部消化管内視鏡検査にて門歯より31㎝，36㎝に食道びらんが認められ当院紹介となった。中分化型扁平上皮癌の診断となり，右開胸開腹下に食道亜全摘，D2リンパ節郭清，胃管による胸骨後経路再建を行った。病理診断は中分化型扁平上皮癌（深達度 sm2，n0，pStage I）と類基底細胞癌（深達度 m3，n0，pStage0）の同時性重複が認められた食道表在癌の1例であった。

28. 胸部中部食道癌に対し Stent を留置した症例

金子高明，大森敏生，大嶋博一
長谷川史郎，姫野雄司
（国吉病院）

症例：73歳男性。現病歴：平成12年7月，つかえ感出現し，食道癌の診断にて chemoradiation を施行して，フォローされていた。平成14年7月，再度つかえ感が生じ，食道狭窄にて化療後，ステントを挿入し食道造影上良好なのにもかかわらず，摂取状況に改善はなく，1ケ月後死亡した。文献的にはステント有用の報告が散見されるが，実際はどうなのか問いかけるとともに，考察し報告する。

29. 切除範囲決定に苦慮した SSBE 発生腺癌の1例

杉原毅彦，土田智一，宮尾陽一
（軽井沢病院）

胃液などの逆流による慢性刺激のために食道扁平上皮が円柱上皮に置き換えられた粘膜をBarrett esophagus（BE）と呼び，長さが3㎝以下のものを，SSBE という。そこから発生した癌は Barrett 腺癌と呼ばれているが，その定義，診断，治療法に関しては未だ議論の余地がある。SSBE，BE を合併しやすい症例に対しては，厳重な内視鏡的サーベイランスによる早期発見が，Barrett 腺癌に対しては食道癌に準じた広範囲なリンパ節郭清を伴う手術が必要と考えられた。

30. 動脈瘤を合併した両側冠動脈－肺動脈瘻の1例

西村麻衣，安野憲一，田中英穂
（小田原市立）
井上育夫，川野　裕，小山隆史
岡本　亮，永井啓之，福田　淳
（同・外科）

症例は55歳女性。近医で連続性心雑音を指摘され，当院循環器内科紹介受診となった。心エコー及び冠動脈造影にて最大径20㎜の動脈瘤を伴う両側冠動脈－肺動脈瘻と診断された。負荷心電図にて虚血性変化を認めたこと，瘤破裂の危険があることより手術適応とした完全体外循環，心拍動下に冠動脈瘻結紮・切離，動脈瘤切開縫縮術を施行し，術後経過は良好である。

31. 医原性仮性動脈瘤に対する超音波カラードップラガイド下の探触子による圧迫修復術の検討

矢内桃子，林田直樹，村山博和
松尾浩三，浅野宗一，大橋幸雄
大場正直，龍野勝彦
（千葉県循環器病）

医原性仮性動脈瘤の発生率は0.08～0.5%，カラードップラガイド下の探触子による圧迫修復術の成功率は62～94%である。1998年から2002年までの5年間で当科にて施行したカラードップラガイド下の探触子による圧迫修復術は7例で，成功率は70%であった。本法は積極的に試みる事のできる治療法であることを若干の文献的考察を交えて検討した。

32. 当院における経皮的心肺補助（PCPS）の治療成績

砂澤　徹，沖本光典，岡田吉弘
（千葉県救急医療）

当施設で施行した PCPS 症例31例を検討した。平均年齢47.7歳，男女比16対15。体外循環手術症例（A群）16例，非手術症例（B群）は15例で，死亡はA群11例，B群8例であった。死因として心不全，脳障害，MOF を認め，出血合併症は6例，下肢虚血は少なかった。PCPS 導入後早期に循環動態が安定し weaning が可